

Title	『氏族大全』版本考 補正
Sub Title	The additional report for the comparative study of printed edition of the Shì zú dà quán
Author	住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.251- 272
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0251">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0251</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『氏族大全』 版本考 補正

住吉 朋彦

稿者は先に、元の欠名氏編集の類書『氏族大全』を取り上げ、日本現蔵および、近代まで日本に伝来し台湾と韓国に現蔵する五十九本を対象として、その版種と版本間の關係を考へ、『氏族大全』版本考』を記した（以下「前稿」と称する）。本書の版本は、中国よりも日本に却つて伝来が多く、日本での翻刻、翻印本も三種を数えるから、日本の中近世期に於ける本書への需めが、殊に強かつたと認められる。さらに詳しく言へば、日本の南北朝から室町期にかけ、将来の元明版および五山版を以て、注釈、講述、詩文の製作など、およそ中国古典中の人物に纏わる故事を問題とする場にあつては、しばしば本書が繙かれ参考とされた。また、その主な受容者が五山禅僧であつたことは、伝存本の書入れや鈐記に明らかである。もとより本書の版本について考察を試みた理由は、中世の漢学者によつて涵養された日本の言語文化について、その一斑を窺うために他ならない。

そこで前稿では、特に日本伝来本を対象として考証を進めたのであるが、成稿後、別の書目について調査を行う機会に乘じ、さらに本書の伝本に接して、日本国内で一本、中国大陸九本、台湾三本、米国二本の、計十五本の著録を加えることができた。このうち、日本の一本と中国大陸の三本、米国の一本を合せた、計五本は、もと日本伝来の品であり、これらの伝本からは、元版に新たに一亜種を認め得るなど、幾つか前稿を増補すべき事柄を生じた。また残りの十本に

ついで、前稿にマイクロフィルムを用いて言及した、台北故宮博物院に現蔵する北平図書館旧蔵の三本を含め、近代まで中国大陸に伝来したものである。前記のように本書版本の伝流は中国に微弱であり、この認識には大勢として変更を要しないと考えるけれども、新たに十本について著録を得た結果、明末と清前期にそれぞれ一版種を加えるなど、知見を増した点があり、やはり前稿では、中国での流布につき過小評価を下した嫌いを免れないことと判明した。そこで、甚だ不調法、かつ不十分ではあるが、これらの伝本の考証から前稿に修訂を加え、暫時の補正としたい。

補正に先立ち、前稿の内容について簡単に再説すると、『氏族大全』の諸本は、大きく言つて、甲から癸に至る十集に組織された本を原型とし、これを十巻と標示する亜種、十集本を二十八巻に分節し増補を加えた変種の、三属からなる。これに版式を加味して詳しく見ると、十集本中、每半張に十六行を備える形を原型とし、別に十七行本、十三行本を存する他、十巻の属に二十行本、二十八巻の属に十四行本を派生した。後者はさらに十一行とする再校本を生み、行数によつて分ければ、都合六類に涉っている。これらの分属、分類に基づいて個々の版本を挙げると、十集十六行本に〔元〕刊本と、これを覆刻した〔元末〕刊本、〔明初〕刊本、日本〔南北朝〕刊本の四種が知られ、〔元〕刊本から派生した十巻二十行本には〔元末〕刊本一種、同じく十集十七行本に明永楽十七年刊本一種、二十八巻十四行本に〔明〕刊本一種が認められる。この〔明〕刊本からは、同十一行の明崇禎五年序刊本一種が生まれた。また十集十六行の〔南北朝〕刊本からは、同十三行の日本元和五年古活字刊本が生まれ、これを覆刻したものが〔江戸前期〕刊行の附訓本である。同本は古活字本の被せ彫りで、やはり十三行本に当たる（計二種）が、別系統二十八巻本の増益部分を抽出編成し、一卷に纏め附刻しており、これはその序を引いて冠することからも、崇禎五年序刊本の影響を容れたのであり、総じて元明版七種、和版三種の計十種が、相互に関係しながら展開された。これを年代に引き当てると、中国では十三世紀末前後

から十七世紀の間、日本では十四から十七世紀の間に版刻があったことになり、特に日本では、南北朝に発して江戸前期に至る間、五山禪僧の受容が盛んであった。右の認識は今のところ大きな修正を要せず、本稿でもこれに基礎を置くこととしたい。以下、前稿に重なる点もあるが、版種ごとに最小限の解説を附した上、新たに知見した伝本を列し、補正を加えたい。

新編排韻増廣事類氏族大全十集

元闕名編

〔元〕刊 十六行本

先ず綱目（一一張）、首題「新編排韻増廣事類氏族大全綱目」、每半張十行、行十六字格。

卷首題「新編排韻増廣事類氏族大全（隔五格）甲（至癸）集（墨紐陰刻）」、次行「一東（墨紐陰刻）」等韻目、次行一格を低し「馮

（墨紐陰刻）〈宮音 始平〉」等と姓氏及び声類、貫籍を標し（有注）、次行五格を低し「能斷」等と章目を標し、次行より「馮簡子」以下本文。每集の張数等、詳細については前稿を参照されたい。

左右双辺（一八・七×二二・〇糶）有界、每半張十六行、行二十八字。版心線黒口、双黒魚尾（不對向）、上尾下集目、間々

大小字数、下尾下張数。大尾題「新編排韻増廣事類氏族大全終（行跨）」。

〈浙江図書館 一三三二〉

一冊

存甲至丙集 民国「邵瑞彭」(次公) 識語

三集を存す。後補藍色艶出包背表紙(二六・六×一六・六糎)左肩に題簽を貼布し「元槧事類氏族大全(存一冊)」と書す。前後見返し並に前後副葉白紙。綱目を存し本文、一冊に三集を収む。卷首匡郭一八・五×一二・〇糎、後印本。

卷首に単辺方形陽刻有界「次・公(書)」朱印記、後副葉後半に「事類氏族大全十集元槧本／汪氏藝芸書目曾著景此殘／本僅存三集汴市賤直買之」(格低六)次公記」墨識(邵瑞彭)を存す。後見返し右肩に小簽を貼布し「永樂二年七月二十五日蘇叔敬買」到一部三本」細書墨識あり。

邵氏の言う如く、汪士鐘『藝芸書舍宋元本書目』元本、類書の部に「氏族大全 十集」と見える。邵瑞彭、字は次公。浙江淳安の人、民国期の議員にして蔵書家。該本は不完全とは言え、中国で元より現在まで、本書の版本が伝存した、少数の事例に当たる。

〈台北・故宮博物院 北平図書館旧蔵書〉

一冊

存己至庚集 明晋王府旧蔵

二集を存す。新補藍色包背表紙(二三・〇×一五・五糎)、次で後補焦茶色艶出表紙、裏打改装。本文料紙の変色が著しい。前後見返し並に副葉新補。一冊に二集を収む。己集首匡郭一八・九×一二・〇糎。

首に単辺方形陽刻「晉府／書畫／之印」朱印記、尾に同「國立北平圖書／館所藏」朱印記を存す。

これも零本ながら、中国旧伝の元版である。なお前稿に於いて、北平図書館旧蔵本三部につき、米國議會図書館製作、日本の国会図書館収蔵のマイクロフィルムを用い、画像から窺い得る点を記したが、その後、原本の調査を経ることが

できたから、仮の著録を確定する意味でも、重複を恐れずに記述した。このことは、下記と同蔵二部についても同様である。

同

〔元末〕刊〔明通〕修 覆〔元〕刊十六行本

先ず綱目（六張）、首題「新編排韻増廣事類氏族大全綱目」。

卷首題「新編排韻増廣事類氏族大全（隔五）甲（至癸）集（刻陰）」以下前版に同じ。詳細については前稿参照。

左右双辺（一八・三×二・一糶）有界、每半張十六行、行二十八字。版心小黒口、双黒魚尾（不対）、上尾下集目、下尾下張数、下象尾字数。大尾題「新編排韻増廣事類氏族大全終（行跨）」。

この版種には、別伝本にすでに修刻が見られ、その字様から明初に降るものと推定したが、次掲の金地院旧蔵本を見ると、卷首を含め、修刻の箇所をさらに増している。即ち甲集第一・二、十三―十六、十八、二十九之三十、三十七―四十、四十三―四十五、四十九・五十張は補刻に係り、同様の張子は乙集以下にも数多く見出される。よって該本を〔元末〕刊十六行本の一亜種と認め、新たに右の如く標示した。

〈布施美術館 一三八六〉

九冊

欠癸集 南禅寺金地院旧蔵

後補古淡洪引表紙(二・三×一四・〇糎)左肩打付に「氏族排韻(集目)」と、右肩より韻目、右下方「共十冊」と書す。裏打修補。網目を存し(欠第六張)本文に入る。每冊一集。卷首匡郭一八・三×一二・〇糎。

〔室町末近世初〕の邦人の朱筆にて豎傍句点、傍圈、傍線、同朱墨にて行間欄上校注、校改、補注書人、欠葉鈔補。〔江戸〕期墨筆にて行間補注書人を存す。首に单边方形陽刻「金地院」朱印記を存す。首冊前見返しに紙箋を貼附し「氏族排韻十本缺一本/元至正版金地院舊藏/明治廿九年一月十日識」墨識あり。

同

〔明初〕刊 覆〔元〕刊十六行本

先ず綱目(一一張)、十行十六字格。

卷首題「新編排韻增廣事類氏族大全(隔九) 甲(至癸) 集(墨册陰刻)」、以下底本に同じ。但し首章編目「能断」。每集の張数等、詳細は前稿参照。

左右双边(一七・七×二二・一糎)有界、每半張十六行、行二十八字。版心中黒口、三黒魚尾(下二尾対向)、上尾下集目、中尾下張数。尾題「甲集終」等。

〔台北・故宮博物院 北平図書館旧蔵書〕

存甲至乙集

二冊

二集を存す。新補藍色包背表紙（二六・三×一六・三糎）。襯紙改装（清代の文書使用）。見返し並に前後副葉新補。網目を存し（首三張欠）本文に入る。毎冊一集、乙集第四十張以下を欠く。間々朱標点を存す。尾に単辺方形陽刻「國立北／平圖書／館所藏」朱印記あり。

新編排韻增廣事類氏族大全十卷

〔元末〕刊（玉融書堂）二十行 翻〔元〕刊十六行本

先ず綱目（一四張）、首題「新編排韻增廣事類氏族大全綱目」、十行二十一字格、姓氏に声類を附す。

卷首題「新編排韻增廣事類氏族大全卷之一（至十）」（大字跨行）、次行「一東」（大字跨行）等韻目、次行圈発下低一格「馮」（大字跨行）等と姓氏を標し（有注）、次で圈発下に韻藻を附し、次行「能斷」（大字跨行）等と章目を標し、直下より「馮簡子」以下本文（小字双行）。詳細は前稿参照。

四周双辺（二〇・三×一二・四糎）有界、每半張二十行、毎行小二十七字。版心小黑口、双線黒魚尾（不對向）、上尾下題「氏族幾」、下尾下張数。卷尾題「新編排韻增廣事類氏族大全卷之幾」（大字跨行）。

なお標記した刊者の名は、前稿に著録した台北故宫博物院藏觀海堂旧藏書の封面のみに拠るが、今回さらなる支証を得ることはできなかつた。



欠卷一至二 明嘉靖三十九年（一五六〇） 識語

新補藍色表紙（二九・三×一六・八糎）。金鑲玉裝、原紙高約二三・九糎、古色を添う。破損修補、天地截断。見返し並に前後副葉白宣紙。本文、首二卷を欠く。每冊一卷。卷三首匡郭二〇・〇×一三・三糎。

朱豎句点、傍圈、欄上朱墨補注書入、別墨にて每姓標目上に声類、貫籍細書、欠葉鈔補。同筆にて卷八第十七張後半、員氏標目下に「江鄰幾云白水縣堯山民掘得志石是員半千墓云十八代凝自梁入魏本姓劉氏彭城／人以其雅正似伍員遂賜姓員 嘉靖庚申臘月十三日王川凍筆記」細書。首に单边方形陽刻「古泉」朱印記を存す。

嘉靖庚申は三十九年（一五六〇）、王川凍の閲歴は不明。当該の引文は、宋の江休復（字隣幾）の筆記『江隣幾雜志』に見える（『禮泉筆録』卷下、『嘉祐雜誌』同）。

〈台北・故宮博物院 北平圖書館旧藏書〉

二帖

存卷二至七

六卷を存す。後補淡藍色包背絹表紙（二四・五×一五・〇糎）左肩題簽を貼布し「氏族大全（幾）」と書す。胡蝶装、〔四周截断〕。本文、每葉背面同士を附着。虫損修補。每帖三卷。第二卷首匡郭二〇・一×一二・四糎。尾に单边方形陽刻「國立北／平圖書／館所藏」朱印記を存す。

新編排韻增廣事類氏族大全十集

明永樂十七年（一四一九）刊（日新書堂） 十七行 翻〔元〕刊十六行本

先ず綱目（二三張）、首題「新編排韻增廣事類氏族大全綱目」、十一行二十字、姓氏に声類を附す。

卷首題「新編排韻增廣事類氏族大全（隔五）甲（至癸）集（墨圈）」、以下底本に同じ。詳細は前稿参照。

左右双辺（一八・二×一二・八糎）有界、每半張十七行、行二十八字。版心小黒口、双黒魚尾（向<sub>不</sub>对）、上尾下「氏族甲」等、下尾下張数。大尾題「新編排韻增廣事類氏族大全終（隔三）癸集（墨圈）」（行<sub>跨</sub>）」。

〈北京大学図書館 四四五〇〉

存甲至戊集

五冊

五集を存す。新補藍色表紙（二四・七×一五・九糎）。本紙に裏打を加えた上、襯紙改装。改糸。前後副二葉。綱目を存し（末葉後半の刊記部分刪去）本文に入る。每冊一集。卷首匡郭一七・九×二二・八糎。

本文中、加點刪去痕あり。卷首に方形陰刻「五湖／世家」朱印記、丁・戊集尾題に重ね同「清□齋」朱印記を存す。

〈上海図書館 七八〇〇九〇一九〉

十冊

新補藍色表紙（二四・八×一六・九糎）。金鑲玉裝、原紙高約二二・八糎。裏打修補、天地截斷。藍色包角。前副新補宣紙一葉、旧補竹紙二葉。綱目を存し（末葉を欠き鈔補、刊記を佚するも、尾題行のみ原紙葉を存す）本文に入る。每冊一集。庚集第三、二十六張を欠く。卷首匡郭一八・〇×二二・八糎。

朱墨傍句点、傍句圈、校改、欄上標圈、標注等書入。首に単辺方形陽刻「半右蓀／監藏印」朱印記、同「自彊齋／藏書

記」、毎巻首に同「自強／齋」朱印記、又首に方形陰刻「百聯堂／覽書／画印記」朱印記、単辺方形陽刻「杜園」朱印記、毎巻首に同「□□／過眼」、首に単辺楕円形陽刻「元本」朱印記、大尾に単辺方形陰刻「廣伯」朱印記を存す。首冊旧副第二葉前半に方形陰刻「得此書費／辛苦後止／人其監我」、単辺方形陽刻「(上層每)仲魚圖象(下層土)」朱印記（二顆、陳鱣所用）を存するも、偽装の疑いがある。

〈蘇州図書館 ○三二・七七〇（複印本）〉

十冊

原本清怡僖親王弘暎旧蔵

新補香色表紙（二四・二三×一六・二糎）中に新補藍色表紙。版本の電子複写印本を装訂した冊子<sup>(4)</sup>。もとの冊子の見開き一張を中央で半折し綫装とす。原紙高約二三・八糎。網目を存し（末尾の第十三張を欠き鈔補）、本文に入る。甲集に二冊を配し壬・癸集に一冊を配する他は、毎冊一集。巻首匡郭一八・三×一二・八糎。

原本の首に単辺方形陽刻「安樂堂／藏書記」印記（怡僖親王弘暎所用）、同「蘇州市／圖書館／藏書」印記を存す。網目末の尾題の前に「延祐甲辰／日星堂刊」記を妄補す。

新刻京本排韻增廣事類氏族大全綱目十集二十八卷

元闕名編 明周尚文增 傅起巖校

〔明末〕刊 十四行本

先ず「徐湯」序（二三張）、首題「刻氏族大全綱目叙」、次行より低一格諱字單擡にて本文（上略）近因閩省倭寇／為梗坊間舊板燒毀無存書林陳氏崑泉／子者購求重梓所賴家藏萬卷此帖猶新／不敢自私因售與四方好古者共之（中略）又得後學中洲子者加以（下欠）。六行十七字。同行款の「明」刊本徐湯序と同内容。

次で綱目（一四張）、首題「新刻京本排韻增廣事類氏族大全綱目」、次行線黒魚尾圈發下低一格に集目、次行低二格に声目、次行低三格に韻目を標し、次行より声類及び姓氏、貫籍を列す。每行五段。覆姓入声「夾谷」氏に至る。十行二十字。尾題「氏族目錄畢」。

卷首題「新刻京本排韻增廣事類氏族大全綱目卷之一（至二十八）（隔五格）甲（至癸）集（墨）／（低九格）江右（大）饒安後學 中洲 周尚文 校閱／盱江 庠生 築野 傅起巖參閱／（低三格）○一東（花口魚尾圈發下低一格）馮宮音 始平」等と韻目、姓氏及び声類、貫籍を標し（有注）、次行三格を低し「能断」等と章目を標し、次行より「馮簡子」以下本文。每章改行、章後に「女德婚姻」「皇明人文」を附す。

甲集	卷一（二三張） <small>（上平声）</small> 一東・馮一	風	卷七（一九張）	二十五寒・寒一二十七刪・環
	卷二（一二張）	二冬・龍一	丙集	卷八（二三張） <small>（下平声）</small> 一先・田一
	卷三（二〇張）	五支・支一		九魚・諸
	卷四（二八張）	十虞・虞一	爰	卷九（二五張）
	卷五（二九張）	十二齊・齊一	丁集	卷十（二四張）
乙集	卷六（二五張）	二十文・文一	卷十一（二八張）	七歌・羅一
		二十二元・宛	卷十二（二三張）	九麻・余
				十陽・陽一
				黃一
				姜

卷十三（一七張） 梁— 羌 （庚集）卷二十一（二七張） 十一齋・欄—三十五馬・假

戊集 卷十四（一七張） 十二庚・程— 十五青・冷 卷二十二（二二張） 三十六養・蔣—五十三謙・湛

卷十五（一四張） 滕— 弘 辛集 卷二十三（二〇張）（去声） 一送・貢— 十遇・遇

卷十六（二四張） 周—二十一侵・尋 卷二十四（二〇張） 十二霽・衛—三十七號・暴

卷十七（九張） 二十二覃・譚—二十七咸・凡 卷二十五（二八張） 三十八箇・賀—五十四闕・念

己集 卷十八（二七張）（上声） 一董・孔— 四紙・綺 壬集 卷二十六（二四張）（入声） 一屋・陸— 十六屑・節

卷十九（二一張） 八語・許— 莒 卷二十七（二四張） 十八藥・藥—三十二洽・郊

卷二十（二三張） 九麌・杜— 鄔 癸集 卷二十八（存一至二十七張）（覆姓）公孫— 夾谷

单辺（一八・三×一一・九糧）有界、每半張十四行、行二十八字。版心粗黒口、双線黒魚尾（向不對）、上尾下「甲集幾フ」等、下尾下張数。尾題「新刻京本排韻事類氏族大全綱目卷幾」。

本版は前稿になく、新たに著録し得た版本であるが、既に前稿に録した同名同卷数の〔明〕刊本と款式を均しくし、系統を同じくする版種である。本版には今のところ、後掲一本のみの伝存で、該本は序の末尾を欠いているが、存する限りは〔明〕刊本の序と同文であるから、同本に拠ってこれを徐湯の序と推定した。その他、両者はよく相似しているが、版本学的な観察から、幾つかの相違も指摘することができる。次にそれらを列挙してみよう。

先ず綱目について、題目の字を〔明〕刊本に「増」と作る所、本版には「増」に作る。次行集目を〔明〕刊本に黒魚

尾下に標する所、本版には線黒魚尾圈発下に標する。第五行の声類を〔明〕刊本に墨囲する所、本版には墨囲しない。次で巻首について、首行下段の集目を〔明〕刊本に墨囲しない所、本版には墨囲する。第五行の姓氏を〔明〕刊本に黒魚尾下に標する所、本版には花口魚尾圈発下に標する。その他、本文中の字体の繁簡や墨釘の存否に相違があるけれども、例証は略する。また巻五と巻二十一の本文は本版の方が少なく、巻五で九張、巻二十一では二十五張の不足がある。これは本系統の特色である明人の記事の増益が、本版では徹底しないためである。さらに版式について、匡郭の寸法はもとより、版心の様式を〔明〕刊本では白口とする所、本版では粗黒口とし、〔明〕刊本では単魚尾とする所、本版では双魚尾として、魚尾下の「フ」号も本版に特有である。

右のように瑣末な事柄について喋々するのは、ただに両者を見分けるためばかりではなく、その關係を考えるためでもある。実は、これまで審さに触れなかったが、本版の字様を見ると、同行款の〔明〕刊本より爛柔で、幾らか後出版種と見え、匡郭の寸法も本版の方が少し小さく、当初は、既知の〔明〕刊本を覆刻したものが本版であろうと予期された。しかし両者の相違を点検していくと、細かな点で本版の方が懇切な造作を示す所があり、通常、覆刻時には、勞を省いてその形式は簡略に赴く傾向があるし、逆に、せつかく増益した本文をわざわざ除き去ることも不審であつて、〔明〕刊本を覆刻して本版を生じたと見ることは、些か躊躇される。

そこで思い合わされるのは、丁丙『善本藏書志』巻二十に「萬曆二年德興北山徐湯」序と「萬曆三十七年癸酉歲秋月陳氏積善堂奇泉梓」木記を存する同名同巻数の版本を録していることである。この序の作者の名は〔明〕刊本首の序と同じであるが、年次を伴う点は異なっている。後掲本に序末を欠くことは遺憾であるが、丁氏録本は末尾に年次を伴っているであろう、そして同本の木記中に見える陳奇泉は、徐序中に見え本書を重刊したと伝える「書林陳崑泉子」と

同族の後人と推されるから、丁本は陳崑泉重刻本の後印か、その翻版であろう。この後に、少なくとも同名同巻数の〔明〕刊本と本版との両種が伝存しており、必ずしも三者が一直線に並ぶとは限らない。実見しない丁本を前提として推測を重ねることは慎まなければならないが、少なくとも稿者知見の両版本を、直接の覆刻関係と見ることは避けて置きたい。

〈米國議會図書館 V/B920/C48〉

十六冊

新補淡黄壁染表紙（二五・六×一五・六糎）。金鑲玉装、原紙高約二二・五糎。破損修補、天地截断。黄壁染包角。前後副二葉。〔徐〕序（末葉後半を欠く）綱目を存し、本文に入る。第十三、十五冊に一卷を充てる他は毎冊二卷。増補「皇明人文」の標目を削つて「皇宋」と鈔補妄改する箇所あり。

清人と思われる淡朱を以て傍句点、行間欄上評補注、別墨にて欄上補注書入、又別墨にて破損部に鈔補を加う。第八、十六巻首に単辺方形陽刻「高陽（書録）」朱印記を存す。

同

清康熙九年（一六七〇）刊〔建〕明雅堂江昇 十四行本

巻首題「新刻京本排韻增廣事類氏族大全綱目卷之幾（隔三格）」某集（龜甲形墨田）、次行低四格に韻目序数、次行線黒魚尾下低一格に姓氏及び声類、貫籍を標し附注、次行低四格に章目を掲げ、次行より本文、首行單擡、低一格。

壬集 卷二十六(二四張) (入声) 一屋・陸一十六屑・節

卷二十七(二四張) 十八藥・藥三十二洽・邲

癸集 卷二十八(一八張) (覆姓) 上平・八孫一入声・夾谷

単辺(卷二十六首一八・八×二二・二糧) 有界、毎半張十四行、行二十八字。版心白口、単線黒魚尾下題「壬集廿六フ」等、下方張数、下辺「昇」と刻す。尾題「新刻京本排韻増廣事類族大全綱目卷之二十六終(隔五)昇」等。大尾題前に双辺有界「康熙庚戌年仲秋月梓書林(每字種子形 墨開陰刻)謹依京本梓行(字小)明雅堂江君昇號海日繡梓」蓮牌木記を存す。

康熙庚戌は九年(一六七〇)。この版種も前稿に著録しなかつたもので、大略「明」刊本以下の、十集二十八卷十四行本の系統に属する。ただ本版も後掲一本を見るのみ、しかも末尾三卷のみの残存であるから、本文系統について詳しく論ずることができない。版式等の部分的特徴を見ると、版心の様子は「明」刊本に近いが、却って「明末」刊本に符合する点もある。なお全本の著録を得てのちに、精確な検証を期したい。

刊者の明雅堂は江氏、明万曆年間以降に通俗類書等出版の事蹟がある、建陽方面の書肆<sup>(6)</sup>。江昇の事蹟については未詳である。

〈上海図書館 長五九八二六〉

存壬集卷二十六至癸集卷二十八

一冊



二集三卷を存す。後補香色表紙(二・八×一四・二浬)左肩に双辺刷粹題簽を貼布し「氏族綱目(壬集/癸集)」「」(第  
/八)」と書す。破損修補。改糸。見返し並に前後副葉白紙。書入や鈴記等は認められなかった。

以上のうち、金地院旧蔵の布施美術館蔵一本を除く十本は、みな元明清以来中国に伝存する版本であった。その多くは零細の残本、または不全本であつて、日本での盛行には及ばないものの、元以来、明清間に受容の跡を止め、本書繙読の命脈は絶えていなかった。そして明末清前期、建安陳氏刊本の系統に、二種の重版を検出し得たことは、いずれもやや粗雑な内容ながら、本書がそうした版本の受容者にも浸潤したことを伝えている。また後者は、その伝統が清代に及んだことを教えており、明末頃までと考えた前稿の認識は改めなければならぬ。総じて本書の受容は、中国の通俗的な編書一般との比較で言えば、特に広く流行したわけではないが、それなりに普及し用いられた、という程度に見積もられようか。中国で宋元版に対する骨董的関心が強まった清代以降、本書旧版の残本も、化粧を施して黄金に擬せられ、幾つかの本はそのおかげで伝わったとも言えるが、それ以前には、堂々たる古典や学術的大作と異なり、安易な版行を重ねて消費され、その姿を多くは止めなかつたものであるう。

新編排韻增廣事類氏族大全十集

元闕名編

〔南北朝〕刊 覆〔元〕刊十六行本

年代が相前後するが、以下は日本に於ける版刻につき、伝本を増補して行きたい。まず〔南北朝〕刊本、いわゆる五山版を挙げる。この版本は主に、劈頭に掲げた「元」刊本に従うので、その構成については「元」刊本の項目を参照されたい。次に版式の異なる点のみを記す。

左右双辺（一八・六×二一・〇糎）。版心小黒口、上尾下題「氏甲」等。大尾題下墨釘、あるいは墨釘を削り明徳四年八月開板円成記を存し（明徳四年印本）、あるいは明徳の刊記を削って無文とする（後修本）。

明徳四年（一三九三）印

〈北京・中国国家図書館 八九八一〉

丁集鈔配

十冊

新補藍色表紙（二六・三×一七・五糎）右肩打付に冊数を朱書す。金鑲玉装、原紙高約二三・〇糎、裏打修補、古色を添加す。天地截断、擬康熙綴。前見返しと、丹紙一葉を夾んで前副二葉白紙、また後副一葉白紙、後見返し丹紙貼附。綱目を存し、本文。甲・乙集を三冊に、壬・癸集を一冊に配する他は、毎冊一集。丙集の第三十二張より末尾までと、丁集の全ては、日本の近世初期の鈔配に係り、罫紙を用いてある。巻首匡郭一八・六×二一・八糎。本文未修。

大尾題行より料紙刪去。その残痕を見ると、墨釘はすでに存しないから、これは明徳四年の刊記が存したものを、後に破り去ったのであろう。本文に室町期の朱筆を以て豎傍句点、首のみ墨筆を以て返点、送仮名、欄上に朱墨を以て補注書入を加える他、別朱にて校改を施す。巻首及び辛集首に方形陰刻「萬／承紀」、毎集首に同「堯圃／卅年精／力所聚」、

毎冊首に単辺方形陽刻「陳百斯／藏書／印」、首に同「佰斯家／藏本」、同「四明張氏／約園藏書」、方形陰刻「壽／鏤」、  
單辺方形陽刻「咏／雪」朱印記を存す。

清朝藏書家の印記を列するが、疑いを存する。近代になつてから、本書の五山版を得て、元版の如くに仕立てたものである。日中間に於ける本書伝流の多寡の差が、このような偽装を産んだ。以下、他の書目と同様、近代以降に日本から持ち出された伝本も少くない。

同

元和五年（一六一九）刊（古活字）十三行 翻〔南北朝〕刊十六行本

綱目欠。卷首題「新編排韻增廣事類氏族大全（隔七格）甲（至癸）集（墨題陰刻）」、次行韻目、次行に姓氏及び声類、貫籍を標し（有注）、次行四格を低し「能斷」等と章目を標し、次行より本文。詳細は前稿参照。

四周双辺（二・七×一六・〇糎）有界、每半張十三行、行二十四字。版心中黒口、双花口魚尾（向対）間、題「排韻卷幾」、張数。大尾題「新編排韻增廣事類氏族大全終」。

〈北京・中国国家図書館古籍館 一二八一八七〉

九冊

清楊守敬 民国松坡図書館旧蔵

新補標色艶出表紙（二七・九×二〇・五糎）。素絹包角、改糸。虫損修補。壬・癸集を一冊に配する他は、毎冊一集。卷

首匡郭二・六×一六・〇浬。

間々朱合豎傍句点、韻圈、行間校改（以上、乙集以下は稀）、稀に墨欄上校改書入。首に方形陰刻「楊印／守敬」、単辺方形陽刻「星吾海／外訪得／秘笈」、方形陰刻「飛青／閣藏／書印」朱印記（以上、楊守敬所用）、同「朱師／轍觀」朱印記、毎冊首に単辺方形陽刻「松坡圖書館藏」朱印記を存す。

新編排韻增廣事類氏族大全十集 增補一卷

元闕名編 闕名點（増）明「周尚文」原編

〔江戸前期〕刊 覆元和五年古活字刊十三行本

題簽、双辺「排韻氏族大全（幾）」、又目錄題簽を存す。封面は、明崇禎五年（二六三二）序刊本の「太史張天如先生重訂」等と謳う「繼善堂陳玉我梓行」の告文に、附訓の上、覆刻。次で管正傳序（四張）、これも崇禎刊本以来の序文に附訓、翻刻。さらに崇禎本に従う目錄（一一張）。ところが本文に入ると、元和刊本に附訓覆刻した本文に変わる。

四周双辺（二・三×一五・八浬）無界、字款不齊。刊記は無く、本文の後に増補、首題「新編排韻增廣事類氏族大全／（低三格）増補皇明人文 太倉 天如 張 溥 訂正／潭陽 玉我 陳國旺 繡梓」以下（五二張）。その本文は、崇禎刊本から周尚文の増補した「皇明人文」章ばかりを抽出、再編成し一卷としたもので、字款は整齊である。

〈北京大学図書館 □031.86/133〉

十一冊

島原藩主松平忠房旧蔵

新補香色表紙（二八・三×二一〇・〇糎）左肩に刷題簽を貼附し、中央に目録題簽を存す。改糸、虫損修補。封面、管序、目録を存し本文に入る。毎冊一集或は一巻。巻首匡郭二一・三×一五・八糎。

毎冊尾に双边方形陽刻「尚舍源忠房」藍印、单边方形陰刻「文／庫」朱印記（松平忠房所用）を存す。

〈米国議会図書館 V/B920/C48.1〉

十一冊

濃縹色艶出表紙（二七・〇×一八・四糎）左肩に題簽剥落痕を存し、稀に巻中に刷題簽を差夾む。五針眼、改糸。天地截断。封面、目録を存し、管序を欠いて、本文に入る。毎冊一集或は一巻。丙集第五十七張（尾）を欠く。巻首匡郭二一・三×一五・八糎。

巻中張氏の編、欄上墨補注、本文に見えない張氏の名を列し、章目下に該当する『蒙求』の標題を補記す。さらに増補の巻では、氏名を補記して明末に至る。毎冊首に单边方形陽刻「象／外」墨印記を存し、毎冊前表紙中央に同印文不明朱印記を存するも、擦り消し。淡紅または縹色不審紙。

本書の内容と元明清版の様式、中国での伝来情況から看取される書物の地位について、上述のように、やや安易で粗雑に墮ちるものと捉えた場合、一方の日本での盛行は、却って特異な現象とも映る。今回取り上げた日本旧伝の五本は、前稿遺漏のうち、たまたま追録することのできた分のみであり、国外にはなお数本の収蔵を聞くが、これらもみな日本伝来の版本であるらしい。本書が日本でよく用いられた理由は、本書のみを材料として軽々に論ずべきではないが、そ

の契機を作ったのは、南北朝室町時代の禅僧たちの活動であったと思しい。

書物の流行には、成立や複製の情況が主な原因を成すから、本書の場合には元代の中国、恐らくは福建方面で本書が版行された際、禅僧による日中間の往来が頻繁で、その最盛期を迎えていたことが、基礎条件となる。また、よく言われるような、禅僧たちの中国文化への憧憬、稀少な唐物に対する尊重の念も加味すべきと思うが、本書の内容に即して言うと、当時の日本漢学の実情が、本書のもつ編纂物としての機能、また書肆によつて洗練された版本の実用性に接し、未だ触発されることの多い段階にあつたと見られ、学問の内実としては、手にし得る版本の広がりに応じ、書目横断的な知識の統合と、即時に取り出し可能な形で再編成が、関心の中軸にあつたと見ることが出来る。このことは、他の編書類書等の流行や、漢籍の講説、漢文学の展開とも併せ考えてみなければならない問題である。

そして、元明版の受容から五山版としての複製へと、禅林でのさらなる普及が起こり、禅僧の啓発によつて、一般の公家や武家が漢籍諸版本の新たな受容者となり、古活字版の流行、書肆の成立という触媒が加わつて、明清版の影響を容れながら附調整版本が作られ、広範な知識の基盤を構成するという、中世後半から近世前半にかけて起こつた、学問および書物の相関とその展開の姿が、本書の伝本にもよく顕れている。こうした情況を勘案すると、結局のところ『氏族大全』は、日本漢学の啓蒙期、新たに知識を求めた者に、遍く用いられた書物と見ることが、より適切であつた。

注

(1) 「斯道文庫論集」第四十輯（平成十七年二月）に掲載した。

(2) 北平図書館旧蔵書は現在、台北国家図書館の蔵にして故宮博物院文献館の管理下にある。前稿では国家図書館の収蔵と

記したが、追証のための便宜を考え、故宮博物院収蔵の標記に改めた。

(3) 諸本「十八代」下に「祖」字あり。

(4) 館側の説明によると、原本は蘇州近傍の蔵書家の寄託を受けていたものであるが、既に返納し、その際に複写本を置いたとする。『中国古籍善本書目』録。後掲の寸法は複印本を計測したもので、実寸に遠くないと推されるが、複写機の性能等により、相応に拡張のあるものと思われる。

(5) 拙稿「米国議会図書館蔵日本伝来漢籍目録長編」(『斯道文庫論集』第四十一輯、平成十八年二月)には、後掲の伝本を録して「覆〔明〕刊本」と記した。

(6) 『祀效新書』『新鐫赤心子彙編四民利親翰府錦囊』等の版刻が知られる。『明代版刻総録』等、著録。

(7) カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館に日本旧伝の明永楽十七年刊本、大英図書館に〔南北朝〕刊本、天津図書館に同明德四年印本、中国科学院図書館に元和五年刊本、南京図書館、大連図書館、ハーヴァード・イェンチン図書館に〔江戸前期〕刊本と思わしき本を収蔵する由である。